

コウノトリ湿地ネットニュースレター



11号2010年10月1日発行  
コウノトリ湿地ネット  
豊岡市城崎町今津1362  
電話 0796-20-8560



第2回ミズアオイ祭り開催される

9月10日少し涼しくなって咲いたミズアオイ

去る9月5日(日)、「第2回ミズアオイ祭り」が戸島湿地にて開催されました。夏の初めには湿地の広範囲にミズアオイが青々と葉を茂らせ、今年は昨年以上のミズアオイが望めそうだと喜んでいたのも束の間、今年の猛暑は、ミズアオイを直撃しました。花が咲かない中、開催すべきかどうか湿地ネットでも悩んだ末、「これからずっと続く祭り、今年中止にするわけにはいかない」と、開催を決定しました。戸島地区の力強い後押しを頂き、昨年同様、屋台、講演会とにぎやかに実施することができました。講演会にもたくさんのお客さんがあり、湿地ネットの恒例の行事として、来年もまたがんばろう！と力をいただきました。

暑い中、たくさんの方に足を運んでいただき、ありがとうございました。



9月5日/ミズアオイ祭りの中から



## 私だけが知っているコウノトリ（ミズアオイ祭りでの講演から）

（兵庫県立コウノトリの郷公園 主任飼育員 佐藤 稔）

ハチゴロウの戸島湿地で開催された「ミズアオイ祭り」で、読売新聞記者の松田さんと共に発表しました。佐竹代表から、「私だけが知っているコウノトリ」のお題で話をして欲しいとのこと。得意分野でもある飼育下の繁殖の話でもと考えましたが、過去に何度となく話しているため、今回は、「飼育個体の餌を横取りする放鳥コウノトリ」という“新ネタ”で挑戦しました。今回は、この“新ネタ”についての話です。



講演される佐藤氏

午後3時前からコウノトリの郷公園文化館横の公開ケージに野外で生活しているコウノトリたちが何処からともなく集結します。（写真-1）



写真-1

午後3時過ぎ、コウノトリの郷公園のマークがついた軽トラックが公開ケージ前で止まり、飼育スタッフがなにやら準備をしています。そうです、飼育個体への給餌です。最も見学者の多い時間帯でもあり、「皆さん、このケージは、12羽のコウノトリが飼育されています。数えてみて下さい。12羽より多いことに気が付きませんか。実は、放鳥したコウノトリが飼育の餌を食べに帰ってきます。」と解説員さんのアナウンスが聞こえます。飼育個体の餌を目的に放鳥コウノトリたちが、公開ケージに集結しています。野外のコウノトリが給餌という人的な餌に依存している状態は、決して良いとは言えません。しかし、現状の容認派と否定派の意見があり、今も結

論が出ていません。豊岡での野生復帰の難しさの一端が表れています。

飼育スタッフは、問題の多いこの状態を毎日見えています。そこで、現状を把握するため、飛来個体のチェックをすることにしました。2007年5月からデータ収集を開始し、現在も行っています。当初は、飛来数も少なく、確認作業は、5分程度で終わりました。最近では、飛来数が20羽を超える日もあり、確認に20分以上を要する時もあります。今回は、このデータを、グラフ化などでまとめました。感覚的に判っていたことが、数値で裏付けられる結果となりました。その幾つかをご紹介します。

最初に、全放鳥個体数に対する公開ケージへの飛来個体数の割合を月別のグラフにしてみました（グラフ-1 参照）。



グラフ-1



飛来率が最も高い月は、1月で約70%が給餌に依存する結果となりました。最も低い月は、6月の約30%で、1月と比較し約40%の差があります。餌生物量の多い時期は、給餌への依存度が低く、少ない時期は依存度が高まると言えます。しかし、それだけでは無いようです。8月と9月の飛来率が、真冬並に高い結果となりました。餌生物量は、多い時期と予測されますが、要因として、圃場は、稲が大きく育ちコウノリが餌場として利用し辛い状態となっていると考えられます。水路や畦は、草丈も伸び、以前の様に容易に採餌出来なくなります。このように、餌生物量以外に採餌場所の環境変化によって給餌への依存度が変化します。また、多くの放鳥コウノリは、圃場(水路・畦を含めた環境)を最も重要な餌場として活用しているとも言えます。2月は、餌生物量の少ない時期にも関わらず 56.6%と飛来率が低下します。2月は、各ペアが縄張を持ち、造巢・交尾などの繁殖行動を始める繁殖期に突入します。テリトリーとなる巣周辺の滞在時間が増え、必然的に公開ケージへの飛来頻度が低下します。放鳥コウノリは、餌生物量、採餌場所の環境、繁殖期など様々な要因で、採餌場所を選択している事が判ります。夏場に依存度が高い対策として、圃場に代わる餌場を設けるなどの方法が考えられます。その意味で“ハチゴロウの戸島湿地”のような恒常的なビオトープは、重要な場所と言えます。

次は、性別での比較です。雄は、年を通し雌より飛来率が高く、給餌される餌への依存度が高いという結果となりました。(グラフ-2 参照)



グラフ-2

このことは、野外の繁殖にも影響を与えています。J0363 や J0403 など野外で自活している個体は、雌ばかりです。そのため、雄と一緒に行動する場面がほとんど無く、この優秀な個体(?)がペアになれない結果に繋がっています。それならばと、今年、J0363とJ0428の雌同士(どちらも自活個体)で繁殖行動を初め、J0363 が産卵するというハプニングがありました。ワイルドな雌について行ける雄は、まだ現れて居ないようです。ただ、コウノリの郷公園は、コウノリにとって出会いの場であり、配偶関係を築く重要な場所ともなっています。野外での繁殖の下支えになっていることを考えると、一長一短があります。その他、個体別や野外で巣立ちした個体での比較も行いました。皆様のご想像どおり、野外で巣立ちした個体は、放鳥個体より飛来率が低く、人的な餌への依存度が低い結果となりました。ただ、放鳥個体は、年毎の飛来率に大きな変化はありませんが、野外で巣立ちした個体は、羽数の増加に伴い飛来率が高まる傾向にあります。

最近では、20羽を超えるコウノリが、公開ケージに飛来する事もあります。給餌された餌の依存度を下げる対策として、環境整備などで餌場となる湿地を増やす事が重要となりますが、早速には出来ません。郷公園においても公開ケージ以外のオープンケージは、進入出来ない対策を施していますが、更に依存度を下げる対策は難しい状況です。放鳥コウノリは、野外の採餌環境が良ければ、野外での採餌を優先しています。結果として、公開ケージへの飛来頻度は低下しています。“飼育個体の餌の横取り”という戦略は、生存や繁殖の戦略として上手に利用し、安定した個体群を形成するために活用しています。野生復帰の初期段階では、当初考えていた以上にコウノリは優秀だと感じます。むしろ、課題が明確になり、これからどう取り組み、課題を克服するのか、人間側の腕の見せ所ではないでしょうか。



## 記者が考えるコウノトリ（ミズアオイ祭りでの講演から）

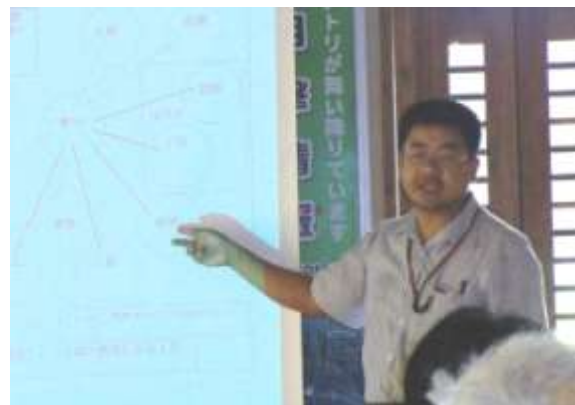
（読売新聞豊岡支局 松田聡）

コウノトリの繁殖は4年目に入り、いろんな場面を見ることができた。中でも豊岡市日撫では、パチンコ店のネオンが煌々と照る電柱上で営巣し、不思議に感じた。しかし、巣の脇にある斜面を登ると理由がなんとなくわかった気がした。この斜面からは兵庫県立コウノトリの郷公園の管理・研究棟が見渡せ、餌時の前後で多くのコウノトリが舞っているのがよく見える場所だった。

他の巣塔も、例えば、百合地は三江小から出石町北部まで見渡せる。日撫は先ほどの通りで、赤石の巣塔も玄武洞から南の野上や円山川を挟んだ福田まで見える。反対に福田の巣塔からは野上や玄武洞の方向が見える。伊豆の巣塔も北の百合地から東側の香住の手前や南の小坂まで。野上の巣塔は反論があるかと思いますが、保護増殖センターへの出入りが見えやすい。ここ戸島の巣塔も円山川河口域がよく監視できる。

なぜ、ほかのコウノトリを監視する必要があるのか。それは昨年の戸島のヒナ襲撃事件のように、繁殖に失敗した赤石のペアが、他のペアの巣に行き、ペアがいなくてヒナを襲うことがあるからだと思う。うがった見方をしたら、その1年前、赤石のペアの雌が、後に戸島ペアの雌を相手に、戸島ペアの雄を争ったことがあったのも遠因かもしれない。つまり、コウノトリは生態系の頂点に立ち、大きくて他の動物に襲われることはなく、同じ種類のコウノトリが敵なのだろう。だから、他のコウノトリの動向がわかる場所に巣を作り、接近に備えるのかも知れない。

繁殖も4年目に入り、これまでは腫れ物に触るように、私たちはヒナや繁殖を見守ってきた。順調に繁殖しており、今後は実験的な取り組みが必要だ。今は平地にしかない巣塔を斜面に建ててはどうか。日撫の巣は電柱上だったが、斜面の途中など近辺に複数の巣塔を建て、どれを選ぶか試してはどう



講演される松田氏

か。使われた巣塔と使われなかった巣塔を比較、検討し、今後に生かすべき点を探してほしい。

また、これまで長崎や宮城など遠距離に飛んだのは幼鳥だ。巣立った幼鳥に電波発信器を付け、飛行経路を調べるべきだ。長野県に飛んだ幼鳥は1日で福井県まで行った。発信器がなく、途中の3000メートル級の北アルプスや白山など北回りで迂回したか、南に回ったのかが、目撃情報頼みではわからない。こういったことを現実離れしているとはいわず、取り組んでいただきたい。

さて、コウノトリに関する取り組みは広がっている。豊岡のコウノトリの飛来地は確実なのを拾い上げていくと26府県にもなる。全国47都道府県の半分を超えた。長崎にも行っているので地図上では空白になっている佐賀の上空も飛んでいるはずだ。同じく空白の富山も新潟や宮城に行った際には通過しているはず。山形や福島も目撃情報はないが、宮城や岩手に行った幼鳥がどちらかを通過しているはずだ。今後も増え続けるのは間違いない。

しかし、地方別では北海道と関東地方だけが無い。北海道は遠いからにしても、関東地方はまったく空白になっている。また、昨年、豊岡で放たれたコウノトリが紀伊半島を回って三重県鳥羽市まで行き、餓死してしまったことがあるだけに、広域での

生息環境が必要だ。



飛来地図

豊岡は孤独ではない。愛媛県西予市、福井県越前市、小浜市などではコウノトリが飛来したことがあり、環境整備の動きがある。ツルやトキも含めた「鳥連合」として鹿児島県出水市、山口県周南市、新潟県佐渡市も協力関係にある。宮城県大崎市はラムサール登録湿地があり、佐渡市も交えて子どもたちのシンポジウムを東京大学で開いた。中でも福井県は先日、兵庫県知事と話し合い、コウノトリの放鳥を福井県でするということで合意した。上郡町や朝来市も巣塔を建てたり、コウノトリに住民票を出したりし、関心を持っている。

関東地方でも27市町がネットワークを組み、河



倉敷コウノトリの会による湿地

川を中心に生息環境整備の動きがある。

先ほどお見せしたコウノトリ飛来地図のように、飛来例が皆無の関東地方で生息環境を整えるのは大切だ。他の繁殖地、生息地、越冬地を確保するのは、豊岡のコウノトリに感染症が広がるなど問題があった際に、ほかでも生息し続けられる場所として重要になる。

また、韓国でも2012年に禮山(イエサン)郡での放鳥が検討されている。大陸ではロシアと中国との間で多くのコウノトリが行き来しており、韓国を含め日本との間で安定的に渡りをするようになれば、豊岡のコウノトリとの出会いの機会も増え、繁殖する可能性も増える。飼育や豊岡の野外だけでは、遺伝的な組み合わせ、つまり家系にも限りがあるので、大陸の個体と豊岡の個体が繁殖するのは遺伝的な多様性を増すことになり、安定した個体群維持につながる。

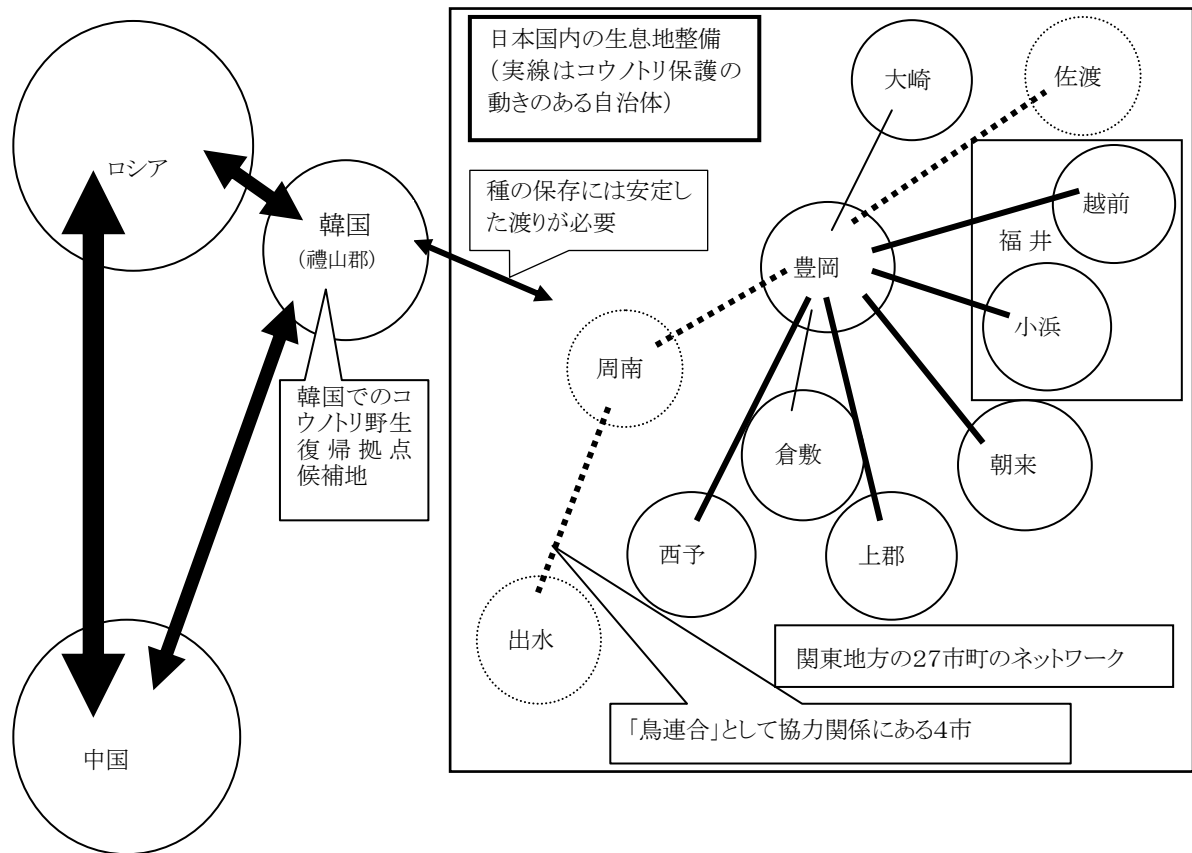
円山川の中州、ひのそ島でコウノトリがいる所にヘラサギも飛んできた。小さな水鳥やサギもいる。こういった風景が日本のあちこちで見られるよう頑張っていきたい。



ひのそ島



野生復帰協力図



今年の繁殖について (2)

(湿地ネット会員 宮村さち子)

百合地の巣塔から、8月29日に3羽のヒナが巣立ちました。これで、今年のコウノトリの繁殖は終了した。その中で、百合地の巣塔での繁殖に、幾つかの問題が明らかとなってきている。

百合地ペア

百合地のペアは、2月23日に6卵が確認され、さらに、3月27日には2羽のヒナが確認された。しかし、4月14日1羽のヒナの死体を親鳥が巣から落とし、4月30日巢内からヒナの死体1羽を回収する。繁殖に失敗。

6月1日6卵を確認(第2クラッチ)。6月30日5羽のヒナを確認 7月8日、1羽のヒナを親鳥が巣の

外へ落とす。巣の中のヒナの数を確認できない。その後、3羽のヒナが成長していることが確認される。今年異常ともいえる暑さの中、親鳥の必死の子育てが続いた。

8月2日には、すぐそばの円山川河川敷で花火が決行される。ヒナたちはおびえていた様子だが、無事に当日をやり過ごし、8月29日、午前、午後と次々に3羽が巣立つ。



ヒナに水をかけてやる親鳥（撮影 北垣和一氏）



8月29日巣立ち直前のヒナたち  
（撮影 澤田賢一氏）

しかし、9月13日に、巣立ち後の1羽のヒナが、そして、9月20日には2羽目のヒナが死亡する。原因は調査中とのこと。

今まででも言われてきてはいたが、今年特に明らかになったのは、百合地ペアの生育率の低さである。今年には1回目の産卵で6卵を確認したが、2羽の孵化、そして孵化したヒナも全て死亡。さらに第2クラッチでの産卵が6卵、5羽の孵化、そして3羽の巣立ち。しかし、巣立ち後1ヶ月もたたないうちに、2羽のヒナが死亡という、異常な事態となった。ヒナの死亡原因については、現在調査中のようだが、遺伝的要因なのか、はたまた環境が要因なのか、原因究明が大変重要なこととおもえる。郷公園の調査結果を待ちたい。

次に今年大きな問題となったのは、豊岡市の花火大会との関連である。3年前も初めての野外からの巣立ち間近という事態に、さかんに心配された

が、花火直前に巣立ちした。今年8月2日の花火当日は、まだ、孵化後1ヶ月余しかたっておらず、驚いて巣から落下すれば、死亡することも考えられた。この事態に際して、花火日直前になってから、市、商工会議所、郷公園、湿地ネットの協議が行われ、花火は決行する、ヒナの落下対策としては、巣塔の周りに落下防止のネットを張るということになった。花火当日の午後から、市、湿地ネット、コウノリの郷公園の三者で、地上4メートルの高さにクッションを載せたネットを張った。結果的にはヒナの落下はなかった。当日、巣塔を見守っていたが、巣塔近くから見る花火は音、閃光ともに恐ろしいほどの近さだった。ヒナたちも、怖がる様子がはっきりとうかがえた。



防護ネット完成

今回の花火をみて、百合地の巣塔は明らかに現在の位置ではよくないと思えた。花火はこれからも続けられる。打ち上げ位置が様々な条件から変えられないのなら、巣塔を移動することを考えなくてはならないだろう。営巣も、花火もこれから毎年あるのだから。

現在豊岡及び近隣各地を含めて、20数か所に巣塔がたてられている。使われている巣塔は限られており、また、それらの巣塔の配置についても必ずしもコウノリの生態に沿ってなされたものばかりではない。放鳥から5年がたった今、巣塔の移動、再配置など、コウノリ野生復帰の観点から考え直す必要があるのではないだろうか。



## 戸島幼鳥の巣立ち直後の行動について

(湿地ネット会員 中野義樹)

コウノリの観察を続けていると、個体によって身体的なことはもちろん、行動面でもそれぞれの個性がはっきりしていることが分かります。野外で生育したいわゆる放鳥2世の行動や、親鳥の育児方法について、僅かではありますがいくつかの特徴が表れてきたのかなと感じています。

以下は、戸島湿地から巣立った個体を観察した素人の主観的な意見です

(平成22年9月12日現在)

生年	個体番号	性別	特徴等
2008年	J0007	オス	2009年島根県にて死亡。
	J0008	オス	殆ど遠出せず、郷公園中心の豊岡在住。
	J0009	メス	愛媛県西予市、兵庫県上郡町、たつの市、宮城県燕栗沼周辺等々、各地を転々としている。豊岡にいる時は出石町中心で、西公開には入っていない。
2009年	J0013	オス	何度か遠出をするが、豊岡に戻っている。豊岡にいる時は出石町中心だが、季節に応じて郷公園西公開の給餌を利用している。
	J0014	メス	何度か遠出をするが、豊岡に戻っている。豊岡にいる時は出石町中心だが、他のコウノリとは少し距離を置いて、一羽でいることが多い。西公開には入っていない。
2010年	J0022	メス	豊岡市内を転々としている。
	J0023	メス	豊岡市内を転々としている。

## 巣立ち後の行動パターン

## (1) J0007・J0009・J0022・J0023 の場合

基本的に父親の J0391 と一緒に行動する。巣立ち後すぐは、田結地区西光寺前ビオトープ周辺や畑上地区水田を中心に採餌する。やがて、円山川ひのそ島に行くことが多くなり、その後、戸島地区を出て行く。

J0022・J0023 は、これまでの幼鳥の中で一番長く親元にいた。戸島地区を離れた後は、それぞれ2010年生まれの幼鳥と一緒に行動している。

## (2) J0008 の場合

同じ年に生まれた J0007 や J0009 とは別行動をとる。

巣立ち後はずっと母親の J0294 と一緒に、幼いうちから郷公園西公開に入ることを覚え、また、豊岡からはほとんど出ていない。

## (3) J0013・J0014 の場合

巣立ち後、間もなく戸島地区を出て、出石地区へ自ら移動する。出石町寺坂地区で偶然姉の J0009 と一緒に、2羽は川での採餌方法を学ぶ。移動後、おそらく戸島地区には戻っていない。

なお、J0013 は餌が野外で採れにくくなると、西公開の給餌を上手に利用しているが、生まれた時からほ



とんど行動を共にしている J0014 の姿を西公開で観たことはない。

出石地区には、先輩コウノトリである J0363 や J0428 がいるが、時々食らう威嚇に対して、J0013 は上手にそれをかわしている。一方、J0014 はいつも予め少し距離を置いている。

### 飛翔方法の伝授？

2010年8月7日(土)、畑上地区でのことでした。まず、母親 J0294 が上昇気流に乗って高度を上げていきます。その後を幼鳥の J0022 と J0023 が懸命に羽ばたきながら追っていきませんが、風をつかみきれないのか、なかなか高度を上げられません。見かねたように J0294 が何度も何度も輪を描いて、それはまるで飛び方を教えているようでした。観ていてじれったくなる位の時間が掛かりましたが、幼鳥2羽は上空へと消えて行きました。

ついでに、「エヒメ」にも触れておきます。

### 厳しい態度で幼鳥の自立を促す親鳥エヒメ

2010年8月28日(土)、郷公園東公開で採餌中のエヒメを観察していた時のことです。奥から飛んで来た一羽のコウノトリがエヒメに近付きます。エヒメはすかさず激しいクラッタリング。近付いてきたのはエヒメの子 J0021 で、ピューピュー鳴いて餌をねだります。エヒメはどうするのかと観ていたら、もう一度クラッタリングをした後、直ぐに飛んで離れていきました。幼鳥はしばらくの間、エヒメに聞こえるように鳴き続けていましたが、やがて餌は貰えないと観念したのか、自ら採餌行動を始めました。

餌が少なくなる季節はあっという間にやってきます。巣立ちしたばかりの我が子に対して厳しい態度にも思えますが、「自分で餌を採ることを覚えなさい」との親心が垣間見えたようでもありました。野生動物が自然界で生きていくことの厳しさを改めて感じました。



2008年戸島湿地で育つ3羽のヒナ



2009年戸島から巣立ちした J0013 と J0014



2010年戸島巣塔から飛立つ J0022 と J0023



(コウノリ湿地ネット代表 佐竹節夫)

前号までに、豊岡周辺のコウノリが大正初期から増えていった理由は、南方に渡った幼鳥が性成熟年齢となって相方を連れてふるさとに帰って繁殖するというパターンを繰り返しながら、個体数、生息域が拡大していったとの仮説を立て、ロシア極東～中国東南部の環境動向も大いに関連するので注視する必要がある、と述べてきた。

今号では、20つがいまで順調に増えながら、昭和9年を境に減少に転じた理由を探ってみよう。

### 戦争の影響

社会は、1931(昭和6)年に満州事変が勃発、1937(昭和12)年に日中戦争、1940(昭和15)年には第二次世界大戦となり、コウノリが暮らす東アジアも戦場と化していく。戦争は最大の環境破壊だ。人々と共に多くの生きものも死に追いやられただろう。豊岡周辺で生まれた幼鳥たちが渡っていった南方・中国大陸の生息環境はガタガタになっただろうし、渡りルート(中継地)も混乱しただろうことは容易に想像できる。多くの個体が死亡したりルートを切断されて、ふるさとに帰ってこれなくなったのではなかろうか。

では、直接の戦場にはならなかった豊岡周辺の親鳥たちは、戦争がどう影響したのだろうか？

これまで、よく言われてきたのは、出石町桜尾にある鶴山の松が伐採されて徴用されたので営巣できなくなり、この地を追われたというものだった。しかし、同町片間の吉谷富造氏は、「20歳の時に終戦を迎えたが、戦争中も変わらずコウノリはいた」と証言される。少なくとも片間地区周辺ではコウノリは居続けたと言われるのだ。

研究者の記録から見てみよう。山階芳麿・高野伸二両氏は1959(昭和34)年の論文(※1)に、当時の営巣数を次のように記されている。

1938(昭和13)年は6巢(片間1、森井1、鶴山2、豊岡付近1、田鶴野1)、1943(昭和18)年と1944(昭和19)年も6巢で、戦争中には「著しい数の減少はない」とされる。1943年もしくは44年に国有林・鶴山の松が伐採されたが、コウノリは片間周辺への移動にとどまったようだ。吉谷氏の言は、このことを言われているのだろう。ところが、終戦の年(1945年)を「境としてコウノリの羽数も巣も著しく減少し」、1947(昭和22)年には1巢だけになってしまう。その後、営巣数は、1948(昭和23)年3巢、49年4巢、50年5巢、51年7巢となり、52(昭和27)年は八鹿町伊佐1巢、河谷1巢の2巢になったと記されている。

結局、鶴山の営巣木を切られたためにその地を去ったというのは、現在でも電柱等に造った巣を撤去されれば、その近くに再営巣するのが通常であることを考えれば、鶴山の周辺に移動しただけだったと言っていい。問題は、むしろその前後の動向にあるように思う。大陸での幼鳥たちは戦争に巻き込まれ帰ってこれなくなったとしても、なぜ、豊岡周辺で営巣し、それぞれの地に留まっていた(はずの)親鳥たちが、1935(昭和10)年から徐々に居なくなっていったのか？ なぜ、戦争が終結した後に1巢にまで減ったのか？そしてなぜ、48年から増え51年には7巢になったのに、52年には2巢に減ったのか？ またまた疑問だらけだ。今回も、読者の方にヒントを乞うことにしたい。

## 戦後のコウノトリの出発点

「春を告げるコウノトリが今年もまた豊岡市へやってきた」1952(昭和27)年4月1日の朝日新聞の記事である。記事によれば、「昨年(1951年)の早春、市内の河谷の裏山に初めて巣をつくった二つがい(※2)がヒナをかえし(中略)晩秋に飛び去ったが、この春もまた二つがい忘れずに三月下旬に訪れてきた」とのこと。

また、1952年10月14日朝日新聞での山本茂信豊岡高校教諭の談。「春に来て秋寒くなると姿を見せない渡り鳥だが、最近では河谷付近の山の中に巣ごもりして越冬しているようだ。保護が行き届いてかなり数がふえてきたのではないかな。珍しいことだ」とある。

もうひとつ、1953(昭和28)年3月4日の朝日新聞。河谷では「今年は珍しくも一つがい越冬し、ほかに市内福田方面にも一つがい(渡らずに)残っている」との記事。

私はこの3つの記事は、(事実認識では疑問点はあるが)すこぶる重要だと思っている。実は、この河谷での繁殖ペアが戦後のコウノトリ歴史をつくったのではないかな、と思うのだ。そして、戦後のコウノトリ保護の取り組みが、親鳥だけでなく幼鳥も積雪地域での越冬を促した、つまり留鳥化させたのではないかな、と思っている。

本誌第9号で触れた剥製からの遺伝子解析を思い出してほしい。山本義弘・村田浩一両教授によって、1958(昭和33)年以降に現豊岡市内で死亡した個体のうち、現存する12体の剥製からミトコンドリアDNAが検出・解析された。結果は、なんと12体全てが同一母系であったのだ。58年以降の状況から見て市外から飛来した個体はないと考えられるので、12羽は全員が親子・兄弟である可能性が極めて高い。彼らは豊岡の地で近親婚を繰り返したのだろう。またぞろ仮説で申し訳ないが、その第1(創設)世代がこの河谷のペアではないかと推測している。

河谷ペアのその後は、残念ながら1958年の営巣を最後に不明だ。注目すべきは53年に初登場した福田ペアで、このペアはその後も59(昭和34)年まで繁殖を続け、65(昭和40)年に飼育下に入り、その年に2羽とも死亡した。そのメスの剥製が現存していて、遺伝子解析の結果が他の11羽と同一母系なのである。つまり、福田ペアは河谷ペアの子どもで、他の11羽は全て子や孫だと考えた次第だ。

近親婚の繰り返しは遺伝子の劣化を招き、繁殖力や抵抗力を低下させると言われる。そうであれば、昭和30年代以降、ただでさえ毒性の強い農薬を抵抗力の弱まった体に振りかけられたコウノトリたちが、絶滅への歩を速くしたことは想像に難くない。では、河谷ペアの子どもたちが、戦前のように南下していれば歴史は変わっていたのだろうか？ 幼鳥の留鳥化は、保護運動の結果だったのだろうか？ 次回では、保護のあり方も考えてみよう。

※1 山階芳麿・高野伸二 1959 「日本産のコウノトリ *Ciconia ciconia boyciana Swinhoe* の生息数調査報告」

※2 上記の山階氏等の記録では1羽であり、河谷地区在住の岡博司氏の記憶でも「巣は一つだった」とのこと。また、同じ朝日新聞の1952年6月22日の大阪市立自然科学博物館の調査記事では「調査団は足を棒にして探しまわり豊岡市のはずれにやっと1ヶ所巣ごもりを発見した」とある。







ハチゴロウの戸島湿地便り

## 8月～9月編

## ボランティア活動に感謝



暑い、暑い今年の夏にも、大勢の方がボランティア作業に来て下さいました。

復建調査設計株式会社、大岡学園ボランティアクラブ、トヨタ部品兵庫共販株式会社豊岡支店、兵庫県豊岡土地改良事務所、兵庫県立大学経済学部、株式会社川嶋建設、明石西高校・滝川中学ボランティア同好会、コウノリ郷公園飼育員の皆様、賛助会員菊池夫妻、田結地区磯崎さん、豊岡市コウノリ共生課、湿地ネット会員、皆さん汗びっしょりになって、草刈り、竹きり、アオミドロ・オオアカウキクサの駆除、湿地内の区画作りにと精一杯の作業をして下さいました。

感想を伺うと、学生さんからは「暑くて大変だったけど・・・草刈機を初めて使い感覚が掴めたので、この次はもっと頑張りたい」「子供の頃、祖父が草刈をしている側で遊んだ。草の匂いに故郷を思い出した。草刈機が使えるようになり嬉しい。実家に帰ったら今度は僕が草刈りをしたい」など、日常の暮らしのなかではチャレンジ出来ないことを体験され、自分の中に広がっていく様を頼もしく感じました。企業の方は、黙々と作業され清々しい姿に感動し、「また来ますよ」の言葉に支えられ、励まされています。

このような機会が増えることは管理者としてとても嬉しく、社会的にみても公共の施設(湿地)を市民団体が管理し、学生・社会人・企業が支えていく仕組み・取り組みは、それぞれが担えるところを分担し、協力して築きあげていくひとつの形だと思えます。



ENEOS わくわく生き物学校



明石西高校ボランティア同好会

また、JX日鉱日石エネルギー株式会社の『エネオスわくわく生きもの学校』は2回目が開催され、お昼はコウノリ育む農法のお米の弁当、そのあとは城崎温泉に入って散策されました。株式会社JTB西日本によるガイド付ツアー(株式会社榎並工務店・三起機会株式会社が参加)や、城崎温泉でコウノリから学ぶ『コウノリ講座』は、いずれもガイド・講習料を頂きました。2件の企業の取り組みは、当会だけでなく、農家や城崎温泉にもつながり、経済効果が生まれていることを思うと、これからも感謝して大切に取り組んでいきたいものです。

## ミズアオイ祭り



9月になっても、まだまだ暑い日が続き・・・昨年には、可憐な花を咲かせていたミズアオイの花が咲かず、『ミズアオイまつり』の開催を躊躇っていましたが、9月5日、猛暑の中で開花を待つミズアオイを見て頂くことにしました。

当日、湿地内を散策され、わずかに咲くミズアオイの花を見つけられた方が、「健気に咲いているわ」と繰り返し言われ・・・躊躇っていたことを恥ずかしく思い、あたたかな気持ちに包まれました。夕刻にねぎらいに来て下さった会員は、「涼しくなったら絶対に咲きますよ。花はね、じい〜っと待とります」と優しい声でおっしゃり・・・「健気に・・・」「じい〜っと待っている」の言葉を、今も胸に抱いています。(実際に、涼しくなった9月下旬に咲き出しました)



ホースの水ではしゃぐ子供たち  
(ミズアオイ祭りで)

駐車場では、地域の皆さんによる『たこ焼き』『野菜』『梅干』などの加工品や、まつりの前日に稲刈りをされ搗きたての『嫁恋し米』。ワークホーム大地の『ラスク』『ネームタグ』の販売。隣の但馬焼さんでは、『のみの市』が開かれ、わらび餅が振舞われ、向かいのエコハウスでは『すごろく』や『ゲーム』で楽しいひと時の提供をして下さいました。

管理棟では、地道にコウノリについて学び、具体的な知識を身につけたいと『私だけが知っているコウノリ』と題して講演会が開かれ、日常的にコウノリをよく見ている人が集まって情報交換、意見交換の場を設けました。

まず、読売新聞の松田記者は仮説を基に提案をされ「戦略的に東アジア全体の中でコウノリを安定させていこう」という発想は、熱心にコウノリを観察されておられるからだ后感心しました。次に、コウノリの郷公園の佐藤飼育員からは、同公園西公開ケージへの野外コウノリの飛来を月別に集計されたデータを基に、季節による給餌依存度の違いを講演して頂きました。佐藤さんは、コウノリから好かれ(頼られ)、嫌われ(警戒され)・・・好かれ、嫌われ・・・ご苦労が偲ばれます。

座談会では、市内の北垣さんと加古川の澤田さんが、猛暑の中3羽を巣立たせた百合地ペアの様子を話されました。北垣さんの想いのこもった「暑さに負けず・・・よう、生き抜いてくれた」との言葉は、澤田さんの鮮明な写真と相まって、みんなの心をひとつにしました。

市内の花谷さんは、五条大橋から南を観察場所にされ、「コウノリをよく見ていると、それぞれの鳥の個性がよく分かってくる」とのこと。特に、給餌に頼らず、ひたすら自力でえさを探し続ける J0363を見続けておられます。J0363は集団の中には入ってはいかないが、他のコウノリが来ても嫌がらないそうで・・・コウノリの話はつきません。

第2回ミズアオイまつりは、「花」のないまつりになりましたが、来場された方々の想いが「華」となり盛会に終わりました。

今回、戸島営農組合がまつりに合わせて稲刈りをして『嫁恋し米』を販売して下さいました。嬉しいことのひとつでした。早速に買い、夕食にいただきましたが、艶があり、ねっちり、むっちり美味しいご飯が炊けました。私の夢は、豊岡の地域ごとのお米を食べてみる『ききご飯大会』をすることです。じっくりとご飯を味わう機会を作りたい。今月は『嫁恋し米』、翌月は『どこそこのナントか米』etc. 炊き方も競ったりして・・・これこそ、自給力。夢は広がり・・・楽しいなあ。

(戸島湿地管理棟 森 薫)



コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿

<新規入会>

法人会員

豊岡市 ドコモショップ豊岡店

個人会員

大阪府 養父志乃夫 太田博之 千葉県 岸康彦

ありがとうございました。

(2010年8月1日～9月25日)



思うこと

(コウノトリ湿地ネット代表 佐竹節夫)

今夏は、還暦を過ぎた私には酷暑だったが、ハチゴロウの戸島湿地の植物にも様々な試練を強いた。猛暑の上に雨が降らないのだから植栽の木々に水やりが日課となったが、それでもアセビは数本が枯れ、サカキは元気で、ネムノキは水さえやれば全員生き残った。ヤマザクラは意外に丈夫だった。

湿地に昨年より多く群生したミズアオイは、ほとんどの葉が日焼けして花芽が出ないまま枯れていった。強烈な日照と水面からの照り返しに加え、水温が高いという3重攻撃には流石に参ったのだろう。「本種は縄文海進期以降に大陸から持ち込まれたので、初めての経験ではないか」との興味深い説を言われる研究者もおられた。一年草なので、来年以降も猛暑が続くようなら、ここでは絶えてしまうのだろうか。



枯れたミズアオイ あ～あ、こんなになっちゃって…

「なんだか過ごしやすかったと思ったら、今日は 35℃か」なんて会話は、まっぴらごめん。温暖化防止が急務だ。

ニュースレター発行を2011年より、年4回発行の季刊とさせていただきます。次のパタパタは2011年1月1日発行です。

「編集後記」

倉敷コウノトリの会を立ち上げ、ビオトープ作りに励んでおられる会員の林春美さんを訪ねた。コウノトリが好きで、餌を探すコウノトリをよく観察されているからこそ出来たビオトープだと思う。「一度ここで大泣きをしたんですよ」と、清々しい口調で言われていた。へこたれそうな時には、林さんを想うと頑張れそうな気がする。『泣く力』には、明日への一歩が隠されている。(森)

本当に今年の夏は暑かった。みんなが言っていることだけど、何回でも言いたい！ミズアオイ祭りは肝心のミズアオイが咲かないまま実施した。聞くと、日本全国、暑さの影響でいろんな花が咲かなかったりしているらしい。いっそ、庭にバナナの木でも植えてしまおうかと思っている今日この頃です。(宮村)